
鹿

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鹿

【Nコード】

N9607M

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

奈良のマスコット鹿。可愛いと思ったら。実際に奈良の鹿は非常に凶暴な連中です。

第一章

鹿

奈良県のマスコットは何か。もう言うまでもない。

鹿である。奈良公園の鹿だ。春日大社の神の使いでもある。

「可愛いわよね」

「そうよね」

「人懐っこいし」

修学旅行で着ている女子高生達が鹿煎餅をあげながらにこにこしている。

「奈良っていいわよね」

「いつもこんな鹿がいてね」

「羨ましいよね」

こんなことを言いながら鹿に餌をやっている。しかしかった。

その奈良の市民達は醒めている。そして忌々しげに言う。

「全くな。図々しいしな」

「何でも食うしな」

「しかもやたら食うしな」

悪食なうえに大食だというのだ。

「この前子供の弁当強奪してたしな」

「ああ、それしよっちゅうだぞ」

「それどころか公衆便所の紙食ってたぞ」

「雑誌もな」

とにかく何でも食うのである。

「何でもかんでも食うからな」

「食ってないわけじゃないのにな」

「何でなんだ？」

「何でそんなに食うんだ？」

奈良の市民達にとってはまさにそうした話だった。

「あの連中な」

「偉そうだしな」

「傲慢だしな」

こう言つてであつた。皆それぞれ言う。奈良の市民達にとって鹿は非常に忌々しく鬱陶しい存在だつた。観光客にはわからない話だつた。

そしてその観光客達はだ。何も知らないまま話すのだつた。

今度は小学生達である。子供達ににこにことして鹿とたわむれている。彼等も鹿については誤解している。鹿に煎餅をあげて食べさせている。

「美味しそうに食べるよね」

「そうよね」

「可愛いし」

「鹿っていいよね」

「そうよ。動物はいいもののよ」

若く美人の先生も子供達に対して言う。

「動物と仲良くしなさいね。鹿ともね」

「はい、先生」

「わかつてます」

「悪戯なんてしたら駄目よ」

先生はこのことも言つた。

「絶対にね」

「はい、わかつています」

「そんなことしませんよ」

「絶対にね」

だがここで、だつた。中学生と思われる一人の少年が彼等のところに来た。見ればその額には三日月形の傷がある。それはまるで。

「あつ、旗本退屈男」

「服着替えないんだ」

「着物だつたらいいのに」

「子供なのに随分古いの知ってるな」

その少年は子供達の言葉に思わず突っ込みを入れた。

「旗本退屈男なんてな」

「それで何で来たの？」

「お兄ちゃんどうしてここに来たの？」

「諸刃流の修業でもしてるの？」

「ああ、退屈の虫が騒いだんだよ」

何だかんだで彼もそれに合わせる。

「それでここに来たんだよ」

「ふうん、そうなんだ」

「それで来たんだ」

「鹿さんのところに」

「おう、それで言っておくな」

彼は鹿を睨んでいた。その目はあからさまな敵意を放っている。

まるでい親の仇を見たかのようにだ。まさにそうした感じであった。

「この鹿だけれどな」

「鹿？」

「鹿がどうかしたの？」

「気をつける」

真顔で告げる少年だった。

第二章

「いいな、気をつける」

「気をつけるって何を？」

「何がどうしたの？」

「油断したら何をされるかわからないからな」

その真顔でこう話すのだった。

「だからな。気をつけるんだ」

「何でこんなこと言うのかな」

「さあ」

「退屈だからじゃないの？」

まだ旗本退屈男の話をする子供達だった。

「それでこんなこと言うのかな」

「そうじゃないの？」

「退屈の虫が騒いだから」

「退屈だがそれでもな。忠告しに来たんだよ」

そうだというのである。

「いいな、その鹿共には気をつける」

「鹿をつて？」

「こんなに可愛いのに？」

「人懐っこいのに？」

「おかしいなと言うよね」

「そうよね」

子供達は彼の話を聞いても顔を見合わせるだけだ。だが少年は彼の彼等に対して尚も言うのだった。それが使命であるかの様にだ。

「こんなに可愛いのに」

「どうして？」

「悪いことでもするの？」

「悪いなんてものじゃない」

彼はこうまで言う。

「もうな。ベトコンだ」

「ベトコン？」

「ベトコンって？」

子供達もベトコンとは何かは知らなかった。その単語を聞いて目を丸くさせてそれぞれ顔を見合わせる。緑の芝生と木々があるその公園の中でその黒い目が目立つ。

「何、それ」

「悪い奴なの？」

「そんなに？」

「ベトコンっていうのは昔の軍隊の一つなのよ」

先生がここで子供達にわかりやすく話してきた。

「ベトナムって国の軍隊だね。ジャングルの中で戦ってたのよ」

「じゃあ仮面ライダーアマゾンみたいなの？」

「そうよね」

「だから何でそういう話はわかるんだ？」

少年はそんな子供達に首を傾げさせる。

「旗本退屈男とか仮面ライダーは」

「だってね。再放送あるし」

「DVDもあるから」

「わかるよね」

「ねえ」

子供達はそれでわかるというのだ。

「だからね。それはね」

「わかるよ」

「ねえ」

こう話してだった。皆相変わらず鹿を可愛がり続けている。しかしだ。ここで彼はまた言うのだった。

「くれぐれも鹿には悪戯するな」

「鹿に？」

「悪戯を？」

「意地悪はしないことだ。それは言うておく」
真顔での言葉だった。

「それはしないことだ」

「何か先生と同じこと言うよね」

「そうだね」

子供達はここでまた顔を見合わせた。

第三章

「何でかな」

「何でこんなこと言うのかな」

「やればわかる」

少年は今はこう言うだけだった。

「いいな、絶対にするな」

「変なお兄ちゃんだよな」

「そうだね」

「そんなこと言って」

「くれぐれもするな」

そしてだ。その時だった。

不意に子供の一人がだ。鹿に煎餅をやろうとしていた。だが。

「はい、あげた」

笑いながらその煎餅を上にしたのだ。所謂意地悪であつた。

「あはは、残念そう残念そう」

「止めなさい」

先生がすぐにその子供に対して叱る。

「意地悪なんかしてはいけません」

「わかりました、先生」

子供は先生に身体を向けて笑いながら謝った。子供にしてみれば他愛のない冗談である。しかしその時だった。子供は何もわかっていなかった。

鹿に背を向けていたのだ。そして鹿は煎餅のことで意地悪をされたのを忘れていなかった。そのうえ鹿はこの隙を見逃さなかった。

前に突進してだ。子供の背中に頭突きを浴びせた。まさに一瞬であつた。

「うわっ」

「きゃっ」

子供は背中を押され前に倒れ込んだ。先生は慌てて受け止める。それで大事は避けられたのだった。しかしである。

「うわ、後ろから」

「それもいきなり？」

「これが鹿なんだ」

「角がなくて助かったな」

ここで少年はまた言った。奈良の鹿はその角を毎年切っている。当然危ないからだ。鹿の角は闘う為にある。飾りではないのである。

「若しあればだ」

「あれ、じゃあお兄ちゃんの額って」

「その向こう傷は」

「そうだ」

少年は真相を話しはじめた。

「額に受けた。鹿をからかってだ」

「そうだったんだ、それで」

「鹿にやられたんだ」

「奈良の鹿には気をつける」

少年の言葉はまさに忠告だった。

「いいな、そういうことだ」

「からかったら絶対に復讐するんだ」

「そんなに危ないんだ」

「隙を見て」

こう話すのだった。子供達にも真実がわかった。

少年は子供達に真実を語り結果としてそれを見てからだ。彼等に背を向けてその場を後にした。その額に疼くものを感じてもいた。

「雨が近いんだな」

向こう傷の疼きは一生のものだった。そして今も公園のあちこちにいる鹿達を見てだ。首を捻りそのうえでその場を後にするのだった。

鹿

完

2
0
1
0
.
3
.
3
3
0

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9607m/>

鹿

2010年10月8日13時44分発行